

平成28・29年度 東京都公立小中学校 ICT教育環境整備支援事業実施校

平成29～31年度 東京都「発達に課題のある児童の指導法の研究・開発事業」研究指定校

平成28・29年度 府中市教育委員会研究協力校

平成29年度 府中市特別支援教室巡回指導拠点モデル校

児童が主体的に取り組む「分かる授業」を目指して

—ユニバーサルデザインの指導方法を生かして—

平成29年11月10日

府中市立府中第三小学校

1 研究のはじまり

平成27年度まで本校では体育の体づくり運動について実践を深めてきた。平成28年度からの校内研究を構想するにあたり、本校の課題を分析した。

- (1)「障害者差別解消法」が平成28年4月1日から施行されることにより、合理的配慮についての校内体制を整える必要がある。
- (2)東京都特別支援教育第三次実施計画により平成30年度から府中市の情緒障害等通級指導学級が特別支援教室拠点校となり巡回指導を始めるため、本校の通級指導学級「つばさ」がモデル校となり、平成29年度に先行実施するにあたり、体制を整える必要がある。
- (3)インクルーシブ教育の進行に伴い、通常の学級においてきめ細かい配慮が必要となるケースが増加している。そのため、ユニバーサルデザインの授業（分かる授業）への転換に迫られている。
- (4)ICT（タブレット・パソコン）や校務支援システム導入により「分かる授業」の実践や校務の改善を行い、児童の学習活動を活性化したり、教師が児童と触れ合う時間を確保したりすることが必要である。
- (5)児童の自己肯定感やコミュニケーション能力の向上を図ることにより、基礎学力の定着や向上を図る必要がある。

等の差し迫った課題に直面していることが分かった。

そこで、皆が分からない「ゼロからの特別支援教育」として、上記5点の課題を、1つの目標として、2年間でできるところまで実践することとした。合言葉はみんな分からない！ゼロからの出発である。

2 研究主題が変わる

1年目の研究主題は「自ら課題に取り組み、コミュニケーション能力や自己肯定感を身に付ける指導方法の工夫—ユニバーサルデザインの指導方法を生かして—」とした。しかし、実践を重ねるにつれて、実践の焦点が多岐にわたり、絞り切れないという課題に直面した。

そこで、児童が主体的に取り組む授業、「分かる授業」を目指し、実践を積み重ねれば、その結果として、児童がコミュニケーション能力や自己肯定感を身に付けていこうという仮説を立て、標記の研究主題に変更した。

3 実践の考え方

【学校教育目標】

人権尊重の理念を基調として、心身共に健康で、豊かな情操と知性を持ち、創造性・国際性を身に付けた人間性豊かな児童の育成を目指す。

【目指す児童像】

○すすんで学ぶ子 ○思いやりのある子 ○ねばり強い子 ○健康な子

目指す姿

特別支援教育が充実する。
児童が自ら課題に取り組む。
コミュニケーション能力や自己肯定感が向上する。

児童が主体的に取り組む「分かる授業」を目指して
—ユニバーサルデザインの指導方法を生かして—

ユニバーサルデザインを生かした指導方法（分かる授業）を構築する視点

- 1 視覚化 視覚、感覚、動作を入口にして、理解や思考ができるようにする。
- 2 構造化 学習の山場を学級や児童の実態に即した構造にする。
- 3 ユニット化 1単位時間の流れを分かるようにしたり活動をパターン化したりする。
- 4 焦点化 学習内容のポイントを明確にして、授業をシンプルにする。
- 5 共有化 自分の考えを他の児童に伝え、思考を深める。
- 6 個別的な配慮 児童の特性に即した配慮を行う。
- 7 ICTの活用 児童の興味・関心や学習の深まりに効果的な場面で活用する。

児童の実態

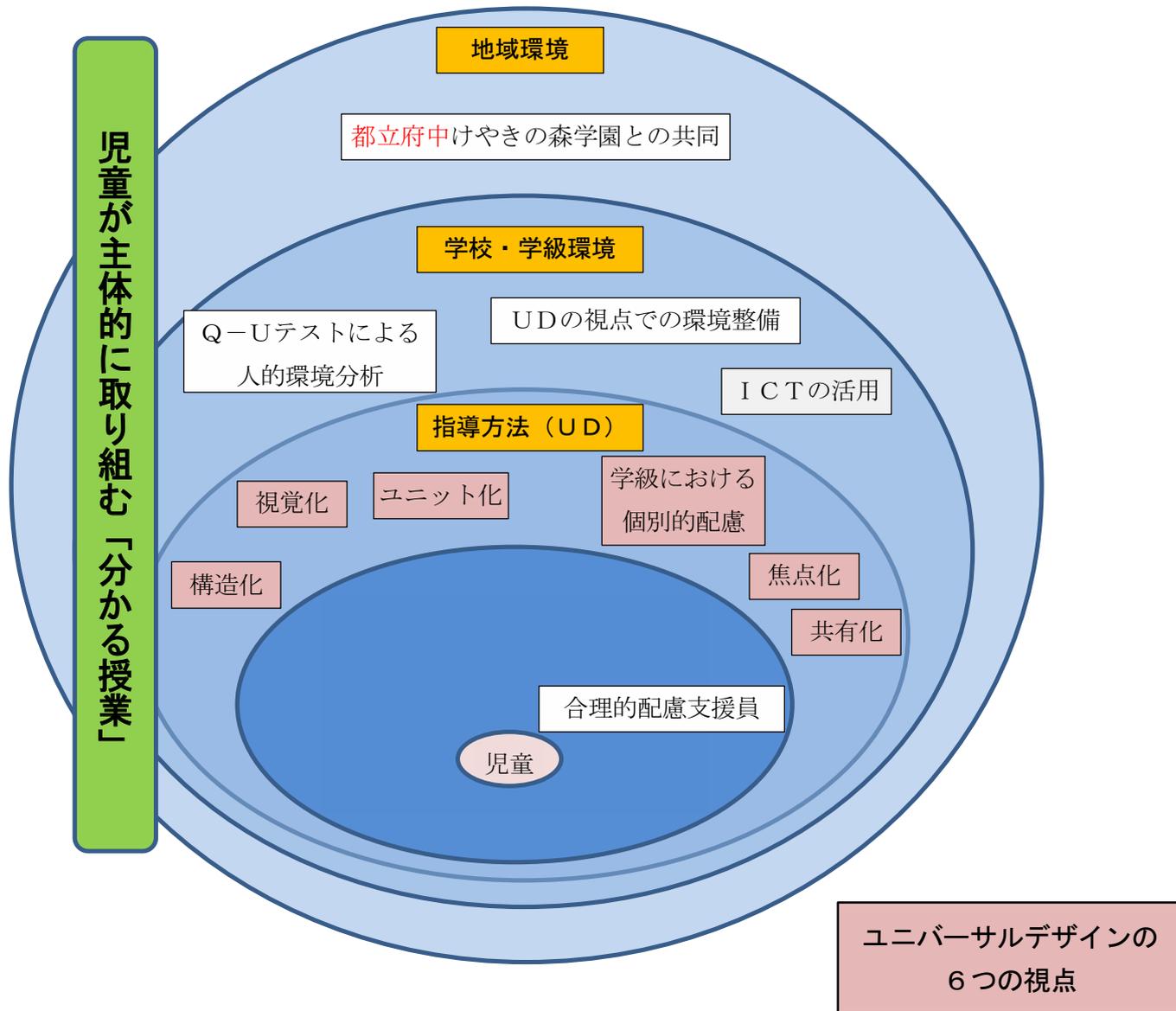
- ・感情のコントロールや他人とのコミュニケーションが苦手な児童がいる。
- ・きめ細かい配慮をすることで力を伸ばすことができる児童が増加している。
- ・自己肯定感が低いなかなか高まらない児童がいる。
- ・自らすすんで課題を解決しようとする意欲を発揮できない児童がいる。

学校としての課題

合理的配慮について校内体制の確立（サポートルーム・個別指導・校内委員会）
特別支援教室拠点校「つばさ」としての巡回指導の先行実施
通常の学級でのきめ細かい配慮の実施（インクルーシブ教育の実践）
ICT（タブレット・パソコン）や校務支援システムの導入

4 特別支援教育における児童を包み込む環境

本校では、ユニバーサルデザインの指導方法を生かし、児童が主体的に取り組む「分かる授業」を行うには、特別支援教育における児童を包み込むような環境の構築が大切であると考えた。その考え方は以下のとおりである。



本校の実践は

「分かる授業」の授業実践と環境整備

の2つの視点に分けて取り組んできた。

5 ユニバーサルデザインの指導方法の考え方

(1) 本校が「分かる授業」で目指す児童像

- 高学年** 主体的に学習に取り組み、考えを深める楽しさを味わえる子
- 中学年** めあてに向かってすすんで活動し、できた喜びを感じられる子
- 低学年** 自分の思いや考えをもち、友達に伝えることで、自分の頑張りに気が付ける子

※コミュニケーション能力及び自己肯定感を身に付けるための「分かる授業」がベースにある。

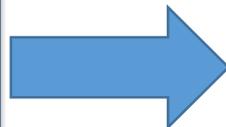
(2) 授業のユニバーサルデザインの基本的な考え方

通常の学級には、発達障害のある児童を含め、授業に対して様々な困難さを感じている児童が在籍している。したがって、授業を構想し、学習を進める上で、発達障害のある児童には「必要」であり、どの児童にも「あると便利」な工夫を増やしていくことが基本的な考え方である。

授業のユニバーサルデザイン化モデル

授業での困難さを感じる児童の特徴

- ・抽象化の弱さ
- ・般化の不成立
- ・記憶の苦手さ
- ・定着の不安定さ
- ・認知の偏り（視覚・聴覚）
- ・複数並行作業の苦手さ
- ・曖昧なものへの弱さ
- ・イメージすることの苦手さ
- ・学習の進め方が遅い
- ・理解のゆっくりさ
- ・状況理解の不十分さ
- ・関心のムラ
- ・不注意、多動
- ・二次障害



授業での困難さを取り除く工夫

- ①機能化（日常生活への実用、発展的課題）
- ②適用化（応用、汎用）
- ③スパイラル化（学年、単元間、教科間の重複の意識）
- ④共有化
- ⑤身体性の活用（動作化、作業化）
- ⑥視覚化
- ⑦スモールステップ化
- ⑧展開の構造化
- ⑨焦点化

環境の困難さを取り除く工夫

- ①時間の構造化
- ②場の構造化
- ③刺激量の調整
- ④ルールの明確化
- ⑤クラス内の理解促進

参考：授業のユニバーサルデザイン研究会
「授業のユニバーサルデザイン」
東洋館出版社

(3) ユニバーサルデザインの授業を構想する

ユニバーサルデザインの授業を構想するときには、以下の点に留意する。

①教科・領域における学級や児童の実態を把握する。

教科・領域によって、学級や一人一人の適応状況は異なる。「学習」「社会性」「注意」「言葉」「運動」「情緒」の面や教科・領域の特性に応じたデザインを構想する必要がある。（参考資料「通常学級での特別支援教育のスタンダード（東京書籍）」P 313チェックリスト）

②各学年の発達段階を踏まえる。

※具体的には「実践事例集」を参照

(4) 発達段階に応じたユニバーサルデザインの視点

本校では、児童や学校の実態から、多くのユニバーサルデザインの視点のうち、①視覚化②展開の構造化③ユニット化④焦点化⑤共有化⑥個別的な配慮の6つの視点に重点を置き、教科・領域の特性、学年・ブロックごとの発達段階に応じた「分かる授業」の実践を進めていくこととした。

① 視覚化 視覚、感覚、動作を入口にして、理解や思考ができるようにする。

通常の学級の授業において視覚化する意識をもつと、児童の情報の取り込みがスムーズになる。授業においては聴覚情報をもとに進めていくことが多いが、音声はその場にとどまらないため、記憶に残らない児童にとっては学習の進み方に困難を生じることになる。しかし、視覚的なものは消えず、その場に残るため、結果的に児童の記憶を助けることになり、必然的に学習の効果が上がる。また、視覚化を積極的に活用していくことで、抽象的なもの、見えないものを「見える化」していく工夫にもつながり、児童にたくさんの気づきを生じさせる効果を生むことになると考える。

低 推理的思考が未熟であり曖昧なものへの弱さ、イメージすることの苦手さなどの特性から、視覚や感覚、模倣、試行錯誤等を通して、課題を具体的に捉えるようにすることが大切である。

⇒ ・具体物操作（机上での作業・黒板での作業） ・板書とノート（ワークシート）の一致
・板書に使うチョークの色の工夫 ・めあてやポイントの表示 ・動作化 等

中 知的な興味が活発になり始めるため、学習の導入時における資料提示、タブレット等のICT機器を活用していくことで、児童の興味関心を持続させる。

⇒ ・小黒板の補助的な活用（要点を整理など） ・板書を使つての学習の振り返り
・ワークシートの書き込む箇所に番号を付ける。 等

高 知的な興味が活発になり、難しい問題に積極的に直面できるようになるため、資料提示の仕方を工夫することで、問題解決的な学習が見込まれる。

⇒ ・学習過程カードの活用 ・構造的な板書 ・ICTの活用

② 構造化 学習の山場を学級や児童の実態に即した構造にする。

学ぶ楽しさは、「できた!」「わかった!」という、満足感や達成感を味わうことから始まる。児童は満足感や達成感が味わえることで、自信をもつことができ、次の活動や学習への意欲につながる。また、「もっと知りたい!」「もっとできるようになりたい!」という知的な好奇心や探求心が高まることも考えられる。そこで、毎時間の学習の中で、満足感・達成感を味わえる構造（山場）を作つて学習を進めていくことが大切である。

【例】・導入 — 展開1 — 展開2 — 山場 — まとめ
・導入 — 展開1 — 山場 — 展開2 — まとめ 等

低 学習の仕方の違いや理解度に応じて、同じ学習活動を繰り返すことで、児童は見通しがもちやすく、安心して活動できると考えた。また、クイズや間違い探し等の活動を取り入れることにより、学習過程に変化ができ、児童の学習意欲が持続しやすくなると考えた。

- ・授業の導入で、本時の目標(めあて)や学習の流れ等を視覚的に提示する。
- ・「◇時で終わりです」「◇◇までやったら△△は 終わりです」とゴールを事前に伝える。
- ・学習の準備（机上やロッカーの整理整頓：場の構造化）

中 知的な興味が発達になり始めることと同時に、集中力が長く続くようになり、少しずつ自分で計画を立てられるようになる。導入時に視覚的な刺激を与えたり、児童の興味・関心がある題材を選んだりするなど、山場までの活動を工夫することで、達成感をより一層感じられる。

- ・聞く活動、書く活動、読む活動等、様々な学習形態を取り入れる。
- ・教科の特性に応じて、授業のパターンを決める。

【例】 「復習小テスト→課題把握→自力解決→発表→ 集団解決・グループ解決→まとめ」

「準備運動→作戦確認→練習→ゲーム→作戦タイム→ゲーム→整理運動→ふりかえり」 等

高 創造的な活動が多くなり、自分の活動をコントロールできるようになってくる。また、秩序を守り、自分で計画を立て、実行できるようになるため、見通しをもたせて活動させることが大切である。

- ・授業に小テストを入れる。授業の最初に行うとすれば復習テスト、最後に行うなら確認テストなど、一定のパターンを理解することで見通しをもちやすくなる。

(それに向けて、主体的に学習に備える習慣が定着する。)

- ・タイマー (終了アラーム) の活用

③ ユニット化 1単位時間の流れを分かるようにしたり、活動をパターン化したりする。

1 単位時間の授業の中で効果的に学習活動を進めるためには、授業の構成を工夫することが重要である。特に、集中の持続力に配慮して、1 単位時間の授業をいくつかの区切って (ユニット化) 多様な活動を組み合わせることにより、多くの児童が授業に取り組みやすくなる。「集中できるのは 15 分」を念頭に、それ以上時間をかける必要があるときは、児童の興味・関心をひきつけ、思考を深める仕掛けを作っておくことが大切である。

低 集中できる時間に限度があることから、10 分～15 分の活動を組み合わせて構成

中・高 集中力が長く続くようになり、推理的思考の発達も見られるようになってくるため、1 単位時間を 2 つのユニットで構成 (25 分+20 分などの組み合わせ)

④ 焦点化 学習内容のポイントを明確にして、授業をシンプルにする。

単元の導入において、どのような力を育てるための活動に学級で取り組んでいくのか、学習のゴールを明確に示す。また、最終的なゴールにつながる、1 単位時間ごとの授業のめあてを提示することを徹底する。「この単元で、どんな力を育むのか」「この 1 単位時間は何が大事で、何が分かればよいのか」を教師は確実に把握しておく。

- ・単元全体及び本時の中で、どのような力を付けるのか明確にする。
- ・単元や本時のねらいとゴールをはっきりさせる。
- ・課題にせまるための発問を、1 単位時間の学習の中で 1～2 に絞る。(発問計画の必要性)
- ・「今、何をするのか。」「何が問題となっているのか。」「何のために行うのか。」を端的に示す。
- ・板書の構造化 ・短冊、小黒板の活用
- ・ワークシートの工夫 (穴埋め形式: 考えるポイントの明確化) 等

⑤ 共有化 自分の考えを他の児童に伝え、思考を深める。

全体指導という学習形態は、個別的な配慮を要する児童にとっては困難な一面がある。しかし、他の児童の意見を聞いたり、自分の意見を発したりするチャンスであるという側面もある。友達の考え方を参考にして、自分の考えを深めたり、友達に伝えるために考えを修正したりすることで、学習の理解を深めるチャンスを作ることもできる。

低 先生や友達、保護者からの賞賛を求める発達段階から、自分の思いを表現し他者に受け止められることで、初めて自分の思いや考えに気付くことができる。そこで低学年では相手の思いを受け止めたり、自分の思いを受け止めてもらったりする活動が大切である。

- ・共有化するための土台づくり

 - ⇒相手を見て聞く態度を育てる。(相手意識をもたせる。)

 - 聞き手を意識して(見て)聞こえる声で話す。

- ・話し方のパターン(話型)の提示

中 仲間と一緒に行動するようになり、共通の目標に協力できるようになったり、グループの友達に認められようとしたりする傾向が見られる。そこで、他の児童との関りを多くもたせたり、個で考える時間と全体で考える(確認する)時間を確保したりすることが必要である。

- ・ペア学習 ・グループ学習

- ・「個で考える時間」→「小グループによる話し合いの時間」→「全体で確認する時間」という学習の流れ

高 自分を信頼し、自尊心が強くなる高学年では、自分の考えをしっかりとつ時間を確保したり、友達の意見を聞いて、自分の考えと比較・修正したりする時間を確保することが大切である。また、自分の意見を他の児童に伝えるための手段を工夫し、自己肯定感をもたせることの配慮も必要である。

- ・自分の考えをもつための時間を確保 ・ICTを活用した共通理解

- ・「個で考える時間」→「小グループによる話し合いの時間」→「個で比較・修正する時間」という学習の流れ

⑥ 個別的な配慮 児童の特性に即した配慮を行う。

個別的配慮は、ユニバーサルデザインという発想から、以下のような配慮ができれば、**発達障害に限らず**、多くの児童にとってもよい指導になるものである。個別的配慮を要する児童は日常の学級経営で気付くことができるが、Q-Uテストの結果から学級集団内における要配慮児童を客観的に把握することもできる。また、「学習」「社会性」「注意」「言葉」「運動」「情緒」の主な面でのつまずきに基づき、一人一人の児童に応じた配慮を行っていくことが大切である。(参考資料「通常学級での特別支援教育のスタンダード(東京書籍)」P313チェックリスト)

【全学年共通】

- ・習熟度に応じた指導において、何種類かプリントを用意しておき、本人が学習する内容を選べる。
- ・個に合わせた補助具や具体物などを必要に応じて活用することで、学習の定着を図る。
- ・漢字練習時など、大・中・小のマス目の印刷された3種類のプリントを用意して、自分の好きなマス目を選べるようにすることで意欲を高め、すすんで学習に取り組めるようにする。
- ・作業工程をすべて一人で行わせるのではなく分業化し、得意なものを任せる。

<例> お花作り 「紙を数える人→紙を折る人→花を開く人→飾り付ける人」

6 指導方法について

(1) 低学年の実践

目指す児童像 自分の思いや考えをもち、友達に伝えることで、自分の頑張りに気が付ける子

算数 2年生 「三角形と四角形」



【視覚化】教材の提示

黒板で仲間分けしたり、分かりやすい印で示したりする。

【共有化】ワークシートの工夫

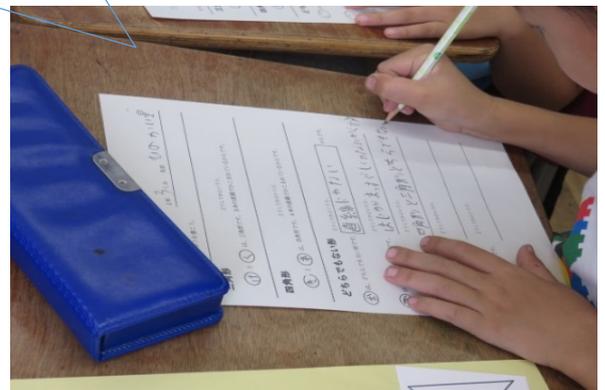
発表話型の工夫

自分の考えを発表話型に当てはめて書くことができるようにする。

三角形 3本の直線でかこまれた形

四角形 4本の直線でかこまれた形

【個別的な配慮】ヒントカード
課題解決のためのヒントを渡す。



国語 2年生 「スイミー～ぼくはスイミー！！～」



【視覚化】教材の提示

大きなまぐろを用意して、想像を広げやすくする。あえて、本文の様子とは違う雰囲気登場させて、本文では、マグロがどの様に描かれているか注目させる。

【焦点化】しかけ文

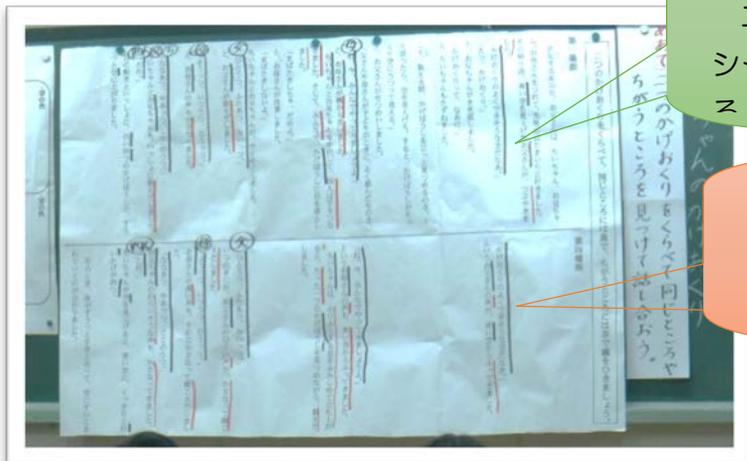
表現をあえて変えた「しかけ文」を用意し、本文と比べて考えることで、スイミーの気持ちに迫れるようにする。



(1) 中学年の実践

目指す児童像 めあてに向かってすすんで活動し、できた喜びを感じられる子

国語 3年生 「ちいちゃんのかげおくり」



【焦点化】板書・ワークシートの工夫

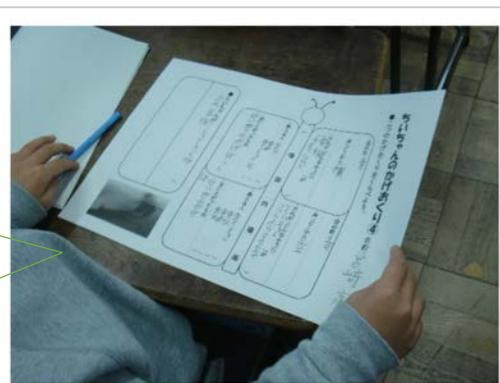
二つの「かげおくり」を上下に並べたワークシートを使い、対応している所を比べやすくする

【視覚化】サイドラインの工夫

サイドラインは共通点と相違点を色分けして引かせる。

【焦点化】ワークシートの工夫

読み取る内容を項目別（「時」「場所」「人物」「色」）に分け、整理しやすくする。



体育 4年生 器械運動「マット運動」



【焦点化】場の選択

自分の課題に合わせて運動の場を選

【個別的な配慮】教師による個別指導



【共有化】タブレット（録画・再生機能）

自分の技のできればえを確認する。



(1) 高学年の実践

目指す児童像 主体的に学習に取り組み、考えを深める楽しさを味わえる子

社会 5年 「森林を守る人々」



【共有化】グループでの話し合い

互いの意見を聞き合い、考えを広めたり深めたり



【視覚化】映像により理解を深める

実際の写真や映像を見て、体験できないことについて学ぶ。

【構造化】板書・学習の流れの構造化
何をどのように学んだかが見て分かるようにする。



算数 6年 「並べ方と組み合わせ方」



【視覚化】問題場面を絵で提示する

より興味をもって取り組むことができ、問題場面を理解しやすくする。



【共有化】自分の考えを友達に紹介する

グループや全体で考えを共有し、学びを深める。